日本人の会話とその教育に関する留学生の意識調査

―中国人、韓国人、台湾人の回答結果を中心に―

小宮修太郎　　長能　宏子　　平形裕紀子

要　旨

世界各国からの留学生を対象に、彼らが日本人の会話の仕方とその教育に関して、どのような意識を持っているかを知るためのアンケート調査を行った。その結果、一般的な傾向としては、多様な側面に自国との差異を感じていること、とくに「はっきり言わないこと」など、いくつかの面に違和感を感じていること、しかし、多くの人はそうした会話の仕方を習得していくことには積極的であることなどがわかった。東アジア諸国からの留学生も上記の点をはじめ、「本当の気持ちと違うことを言う」、「深いコミュニケーションができない」、「同調への圧力を感じる」など多様な種類の違和感や不満を感じていること、その背景にはコミュニケーション文化や人間関係の距離の取り方の違い、さらには集団の中での行動様式の違い等の要因もあることがわかった。

【キーワード】　コミュニケーション文化　会話の仕方　会話の進め方　差異　違和感

A Survey on the Feelings and Thoughts of Foreign Students about Japanese-style Conversation and its Teaching: focusing on the data of students from China, South Korea, and Taiwan

Komiya, Shutaro　　Naganou, Hiroko　　Hirakata, Yukiko

We made a survey by questionnaire on foreign students from 23 countries including the following contents. The main contents are : What feelings and thoughts do they have about Japanese-style conversation and communication? What opinions do they have about practising such conversation style? As a result, we found that they generally feel unnatural or uncomfortable about some aspects of Japanese-style conversation, but they have high motivation to learn such a conversation style. We considered the data of the students from East Asian countries in more detail, and identified some causes which cause negative feelings.

1．はじめに

各国の文化の差異は、それぞれの国に生きる人々のコミュニケーションの仕方や会話の仕方の差異としても現れる。そのため、ある国の国民を一つの集団として見るとき、その内部におけるコミュニケーション行動や会話の形式には、集団としての共通した特徴が数多く見出されることになる。

そして、外国人学習者がその国に滞在しながら言語を習得しようとするとき、その過程において、こうした特徴との出会いの経験が積み重ねられていき、それを通じて、その国の人々の言語行動に対する意識や思いも形成されていくことになる。と同時に、その国と自国のコミュニケーション文化の差異を深く感じる中で、場合によっては、その国の会話の仕方を習得し、実践することと、会話を通じて自己表現をすることとの間のギャップを感じることにもなるかもしれない。

それでは、各国からの留学生たちは、日本人のコミュニケーションや会話の仕方に対して、どのような意識や思いを抱いているのだろうか。また、日本語学習の中で、日本人的な会話の仕方を習得することに対しては、どのような考え方や態度を持っているのだろうか。私たちがこの調査で目的としたのは、これらの点について学習者の意識の実態をとらえることである。

その中でも、特に焦点にしたのは、日本人の会話の仕方に対する違和感や抵抗感などの有無や程度、および、その具体的内容を明らかにすることであった。この課題を焦点として取り上げたのは、以下の２つの理由による。

１つは、各国からの留学生と「日本人の話し方」について話してみると、それぞれが自国での話し方との大きな差異を感じていることを語るとともに、何らかのネガティブな思いも表明するという展開になることが多いことである。そのため、日本語学習者の間にこうした違和感やそれに類するネガティブな感覚が広範に存在することが予想された。

もう１つは、学習者によってはそうした違和感を感じる中で、日本人的な会話の仕方を模倣し、実践することに心理的抵抗を感じている者もいることがわかってきたことである。

一般的に言って、日本語教育の中で会話の練習を行うときは、日本人同士の会話をモデルとして、そこに含まれる慣用的表現や会話の進め方などを練習し、習得させることが多いと思われる。そうしたとき、学習者の側がそれらの会話の仕方に、何らかのネガティブな感覚を持っているとすれば、それが学習者のモティベーションに負の影響を及ぼしていることはないのだろうか。また、一部の学習者が意識しているように、この問題がアイデンティティや自己表現に関わることであるとすれば、上記のような会話教育は異文化間教育の視点からも問題があるということにならないだろうか。

これらの理由と問題意識にもとづき、私たちはこの調査を企画し、その具体化を進めてきた。その中で、調査の主な内容としては次のような点を含めることにした。

（１）日本人の会話の仕方と、自国民の会話の仕方に差異を感じることが多いか。どんな点に差異を感じることが多いか。

（２）日本人の会話の仕方で話すことがあるか。そのとき、違和感や抵抗感を感じることがあるか。その違和感とは具体的にどのようなものか。

（3）日本人の会話の仕方や、コミュニケーションの仕方に、どのような考え、気持を持っているか。日本人の会話の仕方で話すことは好きか、嫌いか。

（4）授業で、日本人の会話の仕方を練習したり、習得することには、どのような考え、気持ちを持っているか。

調査方法としては、5段階の選択方式や自由記述方式を含むアンケート調査を用いることとし、多様な国々の留学生のデータを集めるために、複数の私立大学や公立大学で調査を実施することにした。

その結果、97年7月時点で、計23カ国1地域、107名の留学生から回答を得ることができた。このように、多様な国々の留学生のデータを得ることはできたのであるが、その内訳を見ると、人数の割合では大きく東アジア地域の出身者に偏っていた。異文化に関連する問題であるだけに、国別や地域別の比較が大きな意味を持つと予想され、実際に収集したデータを見てもそのことが強く感じられたのであるが、東アジアを除けば、国別にも地域別にも、それぞれ少数のデータしか集まっていないという状況であった。そのため、今回の報告ではとくに中国、韓国、台湾の留学生の意識を詳しく論じることとし、他の地域、国々については今後ある程度の数のデータが集まった段階で再度、詳しく報告することにした。

2．調査の対象・方法と調査結果の概観

2．1　調査の対象者

日本の大学、大学院で学ぶ外国人留学生、107名（筑波大学、法政大学、城西国際大学、埼玉大学の学生）→資料1参照

国籍：韓国（31人）、中国（28人）、台湾（11人）の他、東南アジア、南アジア、欧米、中南米の各国から1～4名ずつ。合計23カ国1地域→資料1参照

調査対象者の平均滞日期間：約2年（23.2カ月）

2．2　調査の方法

下記のような11項目12問をアンケート調査用紙（→資料2）にまとめ、授業を通して直接配布し、数日後直接回収。大部分の対象者には日本語の調査表を配布したが、一部英語版、スペイン語版、中国語版も配布した。回答も多くの場合は日本語で記述されていたが、一部英語、スペイン語、中国語のものもあった。添付資料には日本語版の調査用紙のみを載せた。

質問1　これまで日本語を習ったり、日本人を話しているとき、自分の国の会話の仕方と違うと感じたことがあるか。→選択肢（4段階で1つだけ選択）

質問2　どんな点が違うか。→選択肢（複数選択可）
→「その他」を選んだときは、自由記述

質問３　日本人の会話例を見て、日本人の会話の進め方と自国の人の会話の進め方はどのように違うか。→相違点と共通点の自由記述

質問４　日本人とのコミュニケーションで、日本人の会話の仕方で話すことがあるか。→選択肢（５段階で１つだけ選択）

質問５　日本人の会話の仕方にしたがって話すとき、何か「不自然な感じ」や「快適ではない感じ」や「言いたくない感じ（無理に言わされる）」が生じることがあるか。→選択肢（５段階で１つだけ選択）

質問６　質問５で「ある」と答えた人は、その内容がどのようなものであるか、具体的に例をあげて説明してほしい。　→自由記述

質問6-2＊　日本人の会話の仕方や、コミュニケーションの仕方について、どのような印象、感想、意見を持っているか。→自由記述

質問７　日本人の会話の仕方で話すのは、好きか嫌いか。
→選択肢（５段階で１つだけを選択）

質問８　日本人と日本語で話すときは日本人の会話の仕方で話した方がいいと思うか。
→選択肢（３段階で１つだけ選択）

質問９　質問８の答の理由を簡単に説明してほしい。
→自由記述

質問10　日本語を習う（習った）とき、会話の授業の中で、日本人の会話の進め方を学んだり、練習したりすることがあるか（あったか）。
→選択肢（５段階で１つだけ選択）

質問11　会話の授業の中で日本人の＜会話の進め方＞（別項で定義：資料２参照）を勉強したり、練習したりすることについてどう思うか。→自由記述

＊　質問6-2は調査の途中で付け加えたものである。初期に実施した分については、この項目への回答が欠けているため、今回の報告ではこの項目の結果は集計の対象としなかった。

２．３　調査結果の概観

問１の「日本語を習ったり、日本人と話しているときに、自分の国の会話の仕方と違うと感じたことがあるか」について「よくある」と答えた人は約52％、「ときどきある」は40％、両者を合わせると90％以上になり、「たまにある」は９％で、違いを感じないと答えた人は一人もいなかった。

では上記の違いを感じた人はどのような点が違うと思っているのであろうか。問２には複数回答で答えてもらったが、各選択肢の選択比率に極端な差はなく、いずれも40から60％台の間の数値を示していた。その中で一番多かった選択肢は「（日本人は）＜はい＞か＜いいえ＞かはっきりしないことがある」の65％、次に多かったのが「本当の気持ちと違うことをよく言う」で57％、その次

が「謙遜する言葉をよく使う」で54％、これに続くのが「日本人は「すみません」をよく使う」の51％であった。「会話の進め方」は、やや低いが、40％を占めていた。

問3の、日本人の会話例を示して、自国の人の会話の仕方との相違点と共通点を自由記述で書いてもらったものでは、回答者107名のうち何らかの相違点に言及した人が84名、共通点に言及した人が60名であった。

問3　会話例

例〔AがBに、あるパーティーに欠席することを電話しています。〕

A：会社員　B：Aの知人

A：もしもし。
B：はい、田中です。
A：山下です。こんばんは。
B：ああ、山下さん。
A：あのー、日曜日のパーティーのことなんだけど。
B：ええ。
A：実は、会社のほうから急に仕事を頼まれちゃって……。
B：ええ。
A：それで、今回はちょっと……。
B：ああ、そうですか。
A：もうしわけない。
B：いいえ。残念ですけど、またこの次にでも。
A：ええ。また、誘ってください。じゃあ、そういうことで。
B：はい、失礼します。
A：失礼します。

問3の回答内容に見られた主な相違点と共通点を、多い順番にまとめると次のようになる。

［相違点］

①直接はっきりパーティに出席できないと言っていない（30人が言及）
②中途終了文（省略）が多い（…けど、…ちゃって）（18人）
③簡単なことを長たらしく言っている（不要なこと、あいさつなど）（14人）
④相づちを入れている（6人）
⑤電話を受けた人が名乗っている（5人）
⑥断わるのに理由を説明している（5人）

⑦「失礼します」という表現を使っている（4人）

⑧相手の安否（健康）を聞いていない（3人）

⑨断わって来た相手をもう一度積極的に誘っていない（2人）

⑩自分から言わずに相手に理解させようとしている（2人）

⑪丁寧すぎる（2人）

［共通点］

「だいたい同じ、ほとんど同じ」とほぼ全面的に共通していると回答した人が21人、「一部を除き他はだいたい同じ」と条件付きで共通性をかなり感じている人が10人いた。その他に具体的な共通点をあげたものの中には次のようなものがあった。

①挨拶をする点（6人）

②理由を言って断わる点（3人）

③丁寧に断わる、礼儀を尊重する（2人）

その他、数は少ないが、「とてもreasonableで、ていねいで、英語にもこのような表現がある」、「長く日本にいると相違点を感じなくなった」（滞日5年8カ月）などのコメントがあった。

問4の、実際に「日本人とのコミュニケーションで、日本人の会話の仕方で話すことがあるか」については、「いつもある」が9％、「よくある」が32％、「ときどきある」が40％、「たまにある」が12％で、「ない」と答えた人は3％であった。

また、問5の「日本人の会話の仕方にしたがって話すとき、何か「不自然な感じ」や「快適でない感じ」や「言いたくない感じ（無理に言わされる）」が生じることがあるか」という質問には、「たまにある」と「ときどきある」の答えが上位2位で、各々33％、32％で合計65％を占めている。「よくある」は12％、「いつもある」は4％で、合計16％になっている。「ない」も少数見られ、無回答もかなりあった。

問6の回答として記述された、「不自然な感じ」、「快適でない感じ」、「言いたくない感じ」の内容では「はっきりしない言い方」や「すみません」が多用されることに対するコメントが一番多く見られた。

また、本当にその気持ちがないのに「また遊びにきて下さい」とか「今度一緒に行きましょう」などと言ったり、誰かの家で食事をしている時、一人が「おいしい」というと皆もおいしいと言い、誰も本当の事を言わないというコメントもあった。

また、「会話が表面的」、「日本人は人とあまり深く話したくないのではないか」というコメントもかなり見られ、「何か決めるときに誰も何も言い出さない。日本人はリーダーシップを持った人がいないのではないか」というコメントもあった。

問7の「日本人の会話の仕方で話すのは好きか嫌いか」という質問で、一番多かった答は「どち

らでもない」で、63％であった。「好きだ」は28％、「大好きだ」は５％、その反対の「嫌いだ」「大嫌いだ」がそれぞれ６％、１％であった。

問８の回答結果を見ると、全体では78％が「日本人の会話の仕方で話した方がいい」と思っている。問９の回答結果では、その理由として「郷に入っては郷に従え」、「日本語の上達のために、そうしたほうがいい」とか「日本人の会話の仕方に合わせるのは日本人や日本文化を尊重することになる」、「いろいろな文化でいろいろな話し方があるのは当然」などのコメントが見られた。

問８で、「そう思わない」も12％、「その他」のコメントも７％あって、合計２割近くの人が否定的な答えであった。その理由として「直接自分の意図を伝えることがいい」、「日本人の話し方に合わせるのもいいが、失礼にならない程度に自分を見せなくてはいけない」など、自分のアイデンティティを守りたいという意味のコメントがあった。つまり日本人の話し方で話すことによって自分のアイデンティティが失われるのではないかと考えていることがうかがえる。

問10の回答結果を見ると、日本人の会話の進め方を授業で習ったことのある人は、「いつも」「よく」「ときどき」「たまに」の順で7、31、28、20％で、何らかの形で習っている人がほとんどであるが、そのようなことを習ったことがないという人は全体の８％であった。

また、問11の「日本人の話しの進め方を授業で勉強したり、練習したりすることをどう思うか」という質問では67人（62％）が「いいことだ、必要だ、役に立つ、大事、当然」など肯定的な回答をしたが、「良い面もあるが、悪い面もある」とか「どちらとも言えない」など中立的な立場を取っている人が19人、無回答と意味不明が14人であった。否定的な人は７人いて、その中の４人は「日本語クラスでの会話の練習は不自然である」と回答している。その他、「日本人のように話すべきか」、「（練習は）あまりよくない。実際の会話をまねするしかない」、「（練習しても）実際には授業で学んだ方法をなかなか使わない」などのコメントがあった。

３．中国人学習者の意識

３．１　国別の集計結果から見た傾向

３．１．１　会話の仕方の差異についての意識

アンケートの問１から問３までの回答結果から、中国人学習者の「会話の仕方の違い」についての意識を見てみよう。

［表１］［　問１の回答分布　］

「違いを感じる」	人数	比率(％)
a　よくある	18人	64.3
b　ときどき	9人	32.1
c　たまに	1人	3.6
d　ない	0	0
合計	28人	100

［表２］［　問２の回答分布　］（複数回答）

「どんな違いを感じる」	人数	比率(％)
a　すみませんを言い過ぎ	13人	46.4
b　謙遜の言葉をよく言う	18人	64.3
c　本当の気持ちと違うこと	16人	57.1
d　はい、いいえが不明確	16人	57.1
e　会話の進め方が違う	11人	39.3
f　その他	2人	3.6
合計	28人	100

まず、問1の「自分の国の会話の仕方と違うと感じたことがありますか」については、64％の人が「よくある」と答え、32％の人が「ときどきある」と答えている。記号のａ，ｂ，ｃ，ｄを4点から1点までに置き換えて、平均値を求めると、3.61という数値になる。この数値は、東アジアの国々の中では最も高いものである。これらの数値から、中国人学習者がかなり頻繁に会話の仕方の差異を感じていることと、相対的にもその頻度の高い集団であることがわかる。

問2の「どんな点が違うか」という複数回答方式の質問に対しては、「謙遜する言葉をよく使う」が64％と最も多く、「本当の気持ちと違うことを言う」「はい、いいえがはっきりしない」も、各57％と高い比率を示している。他の選択肢の比率も4割から5割を占め、全体的にどれも高くなっている。このように、中国人学習者は日本人の話し方の特徴とされるような、いろいろな面について、自国との差異を感じていることがわかる。

問3の、電話で不参加を伝える場面の会話例に対するコメントの記述では、何らかの違いを書いた人が61％だったのに対して、「似ている」と書いた人は11％、無回答が28％であった。「相違点」の記述では、「Ａが、今回は行けません、とはっきり言わないこと」という内容をほとんど全員が書いており、この点は中国人学習者の一致した意見であることがわかった。また、多くの学習者が、これと対比する形で、「中国では、一般に何か事をはっきり話します。」というような説明を付けていた。

「会話の進め方の違い」についての指摘も見られた。その中では、「中国では、初めに結論を示す展開がふつうだ。」とする記述が多かった。一方、「理由を示して、すぐ結論を言う。」と書いている人もいた。また、「日本と似ている。」という意見もあり、こういう場面の会話の進め方には、複数のパターンがあることがわかった。これと関連して、時代の流れ、社会の変化とともに、こういう場合の話し方も変わってきたという記述もあった。複数のパターンがあることは、こういう事情とも関係があるのかもしれない。

３．１．２　日本人の会話の仕方に対する違和感の頻度や好き嫌いの程度について

次に、問4から問7までの回答結果から、違和感や好き嫌いの面について見てみよう。

［表3］［ 問4、問5、問7の回答分布と平均値 ］

国・地域	問4 a b c d e	平均	問5 a b c d e	平均	問7 a b c d e	平均
中国	4, 7,11, 4, 1	3.33	1, 4, 8, 9, 6	2.46	0, 5,20, 3, 0	3.07
東アジア	8,24,28, 9, 2	3.39	2, 7,20,32,10	2.38	3,12,52, 5, 0	3.19
全体	10,34,43,13, 3	3.22	4,13,34,35,19	2.45	5,28,67, 6, 1	3.29

＊問4、問5でa,b,c,d,e は「いつも、よく、ときどき、たまに、ない」の意味。
問7で、a,b,c,d,e は「大好き、好き、どちらでもない、嫌い、大嫌い」。数字の列は、それぞれ、a,b,c,d,eを選んだ人数を示す。

問4の「日本人の会話の仕方で話すことがあるか」という質問に対しては、「ときどき」「よく」が多いほうで、合計すると、64％となる。平均値は3.33で、全体平均よりやや高く、韓国人と比べると、やや低くなっている。

問7の「日本人の会話の仕方で話すことが好きか、嫌いか」という質問に対しては、約7割の人が「どちらでもない」を選んでいる。「好きだ」は18％、「大好きだ」は0％になっている。この2つの合計で、対象者全体の平均は31％であるから、それに比べて、かなり低い比率であると感じられる。一方、「嫌いだ」は12％で、こちらは全体平均の6％と比べると、かなり高い比率である。

問5の「その仕方で話すとき、不自然な感じや快適ではない感じが生じることがありますか」という質問に対しては、aからeまで、答の分散が見られる。その中では、「ときどき」「たまに」が多いほうで、それぞれ約3割を占めている。数値化した場合の平均値は2.46で、全体平均とほぼ同じ程度であるが、東アジアの中では、最も高い数値になっている。

なお、この問5の平均値は、どの国・地域も2点台になっているのであるが、これは違和感や不快感の生じる頻度を示すものであり、それらの強さや深さの程度を示すものではない。それらの程度や、質的な面については、問6の自由記述部分の内容などから読み取ることができると思う。問6の集計結果については、3.2節で詳しく報告する。

3.1.2　日本人の会話の仕方に合わせることや、練習することに対する意識

〔表4〕〔問8、問10の回答分布と平均値〕

国・地域	問8 a b c	平均	問10 a b c d e	平均
中国	20, 3, 3	4.31	2,10, 8, 4, 2	3.23
東アジア	53,12, 5	4.16	3,21,19,17, 6	2.95
全体	83,13, 8	4.21	7,33,30,21, 9	3.10

*問8でa,b,c は「そう思う、そう思わない、その他の意見」の意味。

問10でa,b,c,d,e は「いつも、よく、ときどき、たまに、ない」の意味。

問8の「日本人とは、日本人の会話の仕方で話したほうがいいと思うか」については、約7割の学習者が「a．そう思う」を選んでいる。しかし、「b．そう思わない」「c．その他の意見」を選んだ人も約1割ずついることが注目される。

問9で、「問8の答の理由」を見ていくと、肯定派の理由で最も多いのは、「郷に入っては郷に従え」または、それに類似した内容のものである。また、「日本語も日本文化の一部であり、その文化を尊重すべきと思う」という内容のものや、「日本語の上達のために、その文化も学習すべきだ」という意見や、「コミュニケーションを円滑にするためにそうしたほうがいい」という意見などが見られた。

否定派の理由では、「自分らしく話すのは自然だと思っている」とか、「皆が日本風になってしまうと日本人にも外国人にも利点はない」など、アイデンティティの維持や多文化の共生という視点からの回答が見られた。

問10の「授業で、日本人の会話の進め方を学んだり、練習したりすることがあるか」については、「よくある」「ときどき」がそれぞれ約3割を占めていた。平均値は3.23で、全体平均より少し高くなっている。　問11の「授業でそれを学んだり、練習したりすることについては、どう思うか」に対しては、記述した人の多くは肯定的意見であり、1人だけが否定的意見を述べていた。また、中立の意見が1件、立場不明の意見が6件あった。回答内容を分類して1つの表にまとめてみると、以下のようになる。

[表5]　[問11の回答例]

肯定的意見・・9件
①<日本語の上達のために役立つ> 例1・日本語を日本人の会話の進め方で話しているとき、自然な感じがする。それを勉強しないと、日本語が上達できない。 例2・1つの言語を勉強するには、とても大切なこと。
②<日本人との交流、文化理解のために役立つ> 例3・いいと思う。日本人との交流もうまくいくでしょう。 例4・日本語だけ勉強するのは、物足りない。日本の文化、日本人の考え方も理解しなければならない。
③<日本社会で生活するのに必要> 例5・それを勉強する必要もあると思う。相手によって日本人のように会話を進む必要があることに応じるため、この面の知識は欠かせない。
否定的意見・・1件
①<授業より、他の場で習得できる> 例6・あまり積極的ではない。授業の他、それを身につける機会がいくらでもある。先生からは、本当の日本人の話し方を習得しにくいかもしれない。

以上のように、多くの回答からは、肯定的であると同時に積極的な賛成の雰囲気が感じられた。また、賛成理由の内容は、それ自体への興味、関心というよりは、何かのために役立つことへの期待という道具的理由が多いと言える。

3.2　中国人学習者が感じる違和感についての考察

ここでは、問6の回答結果から、中国人学習者が日本人の話し方のどのような点に違和感や不快感を感じているかを分類した上で、それぞれの種類の違和感の背景要因などについて考察する。

3．2．1 違和感や不快感の内容と種類

問6の回答の記述内容を分類、整理していくと、以下のような9つの種類にまとめることができる。それぞれの種類の下に示した例文は学習者が記述した回答内容を要約したものである。

[表6]［問6の回答の種類と例］

① はっきり言わないことに対する違和感、不満・・・・・・・・・・・・・・・3件
例1・不自然な感じというのは、ものことをはっきり言わずに、自分の意見もストレートに言わないこと。
② 深く心を伝え合うコミュニケーションがしにくいという不満・・・・・・1件
例2・日本人は、自分の気持ち、考え方を伝える意欲が強くないので、話を深く進めない感じがする。
③ 真意を推測しながら聞くので疲れるという不快感・・・・・・・・・・・・1件
例3・相手の真意がわからなくて、よく困る。いつでも相手の話を推測するのが疲れる。
④ 会話の決まり文句や社交上の習慣に対する違和感・・・・・・・・・・・・3件
例4・本当にお世話になっていないのに、『いつもお世話になっています。』と言わなければならないときがある。言ったあと、とても不自然に感じる。 例5・本当の気持と違うことをよく言う。料理がおいしくなくても、ほめる。ほめ方も言い過ぎじゃないかという不自然な感じがする。
⑤ 相手の話を信用して聞けないという不信感・・・・・・・・・・・・・・・1件
例6・相手の話に対して、真実じゃない感じがある。
⑥ ある種の非言語行動に対する違和感・・・・・・・・・・・・・・・・・・1件
例7・（例6に続けて）話す時、相手の目を見ないのを不快適に感じる。
⑦ 待遇表現に関する領域での違和感、不快感・・・・・・・・・・・・・・・3件
例8・日本人の友人に『おまえ』と呼ばれたときは、とても嫌な感じがする。 例9・丁寧すぎると、人との親しみが感じなくなる。 例10・敬語を使うとき、不自然の気がする。
⑧ 同調を迫られるという圧迫感・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2件
例11・おいしくなくても、他の人が言ったら、自分も『すごくおいしいよ』と言うしかない感じ。 例12・不自然な感じというのは、日本人のように装って話さなければならないこと。そうしないと、変に扱われがちだとおもって、そうする。
⑨ アイデンティティの問題に関わる不快感、違和感・・・・・・・・・・2件
例12'・（例12に続けて）自分に対する不正直な感じがする。 例13・日本人の受け答え方は自分の言い方と違うので、その仕方で受け答えしてるときは、不自然の気がする。

3．2．2　各種の違和感の背景要因

こうした違和感や不快感が生じる背景には、両国のコミュニケーション文化の違いという大きな要因がある。また、そのことと関連して、人間関係や社会関係の領域における文化の違いなども背景要因となっているのが感じられる。そこで、次に、問6－2の記述内容も参考にしながら、上記のような各種の違和感を生み出す要因について、考えてみたい。なお、文章の中で「問6－2の追加回答」とあるのは、初期に調査を実施した人たちに、後日連絡してこの項目に対する回答を寄せてもらった場合のものを示している。

(1)「はっきり言わないこと」に関連する違和感の背景要因

上記の①②③の種類の違和感は、「はっきり言う」程度に関する日本、中国のコミュニケーション文化の差異によるものである。

これまでのコミュニケーション文化の比較研究の成果によると、日本は「高コンテキスト文化」の典型とされる[1]。すなわち、そこでは意味の伝達や解読が、言語コードよりは場面のコンテキストに依存して行われる度合いが大きいため、伝達されるメッセージの中に含まれる情報の量はおさえられる傾向が強くなるということである。中国も、大きな分類では高コンテキスト文化に属すると言われるが、その程度は日本よりはかなり低いようである。つまり、中国人のほうがコミュニケーション行動において、より直接的に言葉に表して表現する傾向がある、ということになる。両国のこうしたコミュニケーション文化の差異は、北京大学に留学していた日本人の次のような言葉によく表されていると思う。

「例えば、自分の意見を言うとき、日本人と中国人とでは、明らかな違いが見られます。中国人は、一般的にはっきり、率直に自分の考えを述べます。多くの日本人留学生が『中国人は口論をするのが好きだ』と言うほどです。それに対して我々日本人は、婉曲な言い方をします。はっきりものを言うと、相手と衝突することになるのではないかと考えています。日本人は普通、相手の表情、黙っている時間の長さ、ちょっとした感嘆の言葉などで、相手の気持ちや態度を知ることができます。日本語の中に複雑な敬語や婉曲な言い方が多いことに現れています。（中略）かつてある日本人留学生が私に『日本で他人と話をするときは、相手の態度や考え方を推測しなければならず、実に面倒くさい。その点、中国では、思ったことをそのまま気にせずに言えばいいので、気持ちがいい』と語ったことがありました。」（岩城英規氏、1991年、留学中の文章[2]）

こうしたコミュニケーション文化の差異がもたらす問題点の1つは、中国人学習者が日本人とコミュニケーションしようとするとき、相手の真意を推測するための意識的努力をしなければならないこと、そして、そのような努力にも関わらず誤解してしまう場合も多くなることである。このため、分類表の例7のように、「相手の真意がわからなくて、よく困る。いつでも相手の話を推測するのが疲れる。」というような違和感も生じてくることになる。

(2)「深いコミュニケーションがしにくい」という不満の背景要因

上記の③に属する違和感や不満に関しては、「はっきり言う」程度に関する差異だけでなく、各種の人間関係における行動様式や考え方の差異も１つの背景要因になっていると思われる。

例えば、友人関係になったとき、互いにどのように行動し合い、コミュニケーションし合うか、という面においても日本と中国の間には文化の差異があるようだ。また、初対面の相手との付き合い方や、その後、関係が深まった段階での交際の仕方という面でも、それぞれの文化の持つ特徴、傾向が見られるようだ。これらの点については、中国人論や、日中文化比較論の文献に多くの記述があるが、６-２の追加回答の１つにはそれらを集約したような内容のものが見られたので、それを紹介しておく。

「日本人は、人と人との間につねにある距離を保ちながらコミュニケーションをしているようです。例えば、中国では友達のために何でもしてあげるのが普通ですが、日本ではもし自分の親友でも過ちを犯したら、助けてあげる友達はいるかどうかは分からないでしょう。中国では、忠と義とが昔から強調されて、友達とは血と肉のつながりと考えている人のほうが多いようです。逆に、日本人の友達観はまるで“君子の交わりの淡きこと水の如し”という名言と同じようです。」

ここに記されているように、中国には友人関係についての広く共有された観念があるようで、それは文化的伝統の中で形成、維持されてきたものと見られる。実際の行動においても、お互いに遠慮なく頼んだり、頼まれたりするようで、人間関係の距離の近さが感じられる。また、相互の信頼感にも深いものがあるようで、そのことからお互いに何でも話せる関係になっていることが多いようだ。こうした友人関係に慣れている彼等から見ると、日本人同士の友人関係というものは互いに遠慮し合った、距離のあるものに映ることになる。

また、この学習者は、それ以外の人間関係についても一般的に、日本人のほうが人間関係の距離の取り方が大きいと見ているのであるが、この点も中国人論等の各種文献が指摘していることと一致している。

このような意味で、各種の人間関係における行動様式や考え方の差異があることも、中国人学習者の側に「日本人とは表面的なコミュニケーションしかできない」とか、「深く心を伝え合うコミュニケーションがしにくい」といった印象や不満を生み出す要因になっているものと思われる。

(3)「本当の気持ちと違ったことを言う」に関連する違和感の背景要因

上記の④、⑤の種類の違和感は、「本当のことを言うべきだ」あるいは「正直であるべきだ」という規範に関する面でのコミュニケーション文化の差異によるものだと思われる。

その差異の全容を知るための参考文献や資料は発見できなかったが、今回の調査で得られた回答や、６-２の追加回答の中に、その差異の主要な側面を示しているものが見られた。それらは、この点でも、日本と中国の文化の差異が大きいことを感じさせるものであった。

例えば、追加回答の１つに「中国では、相手によって話し方を変えることも、不正直だと考えら

れる。」という内容のものがあった。日本でも、相手によって表裏のある態度を取ることは「不正直」と見なされ、非難の対象になることもある。しかし、この回答が例としてあげているものは、以下のように「話し方の切り替え」という次元の問題なのである。

「会話の仕方に対するもう１つの印象は、日本人は話をするとき言葉も場合によって違うことです。（中略）言葉づかいの違いは、国の習慣によって、違うイメージも生み出すのです。日本の学校でも見られることですが。学生たちは盛り上がって話をしている途中、先生が来て、学生のみんなが急に態度が丁寧になって、先生に挨拶するですが、私の国では、これは正直ではないと見られているのです。」

この回答からは、「正直さ」の下位カテゴリーである「相手によって態度を変えるべきではない」という規範の具体的内容という点で、日本と中国の間に差異があることが感じられる。

次に、「正直さ」のもう１つの下位カテゴリーである「本当のことを言うべきだ（嘘をつくべきではない）」という規範に関しての差異を見てみよう。この規範の領域では、特に、その規範が適用される範囲、逆に言えば、その適用除外が認められる範囲についての差異を示している事例が２つ見られた。

その１つは、「交流の場面で、出された料理の味の感想を言う」ことに関してのものである。上記の例５の回答であるが、そこには「日本人は、おいしくなくてもほめる。」とある。このことについては、何人かの中国人留学生から話を聞いた経験があるが、いずれも、「中国では、本当の感想を言います。言わないと、嘘を言ってる気分になります。」と語っていた。したがって、この事例は、上記のような場面でも「正直さ」の規範が意味を持つことを示している。

もう１つは、「会話の初めのあいさつの部分」に関してのものである。例４では、「お世話になっています。」と自分も言うとき、そしてそれが事実に反しているとき、強い違和感を感じることが述べられている。これは、日本と中国で「会話の始め方」について基本的な習慣の違いがあることと結びつけて考えると、その原因がより深く理解できるようになると思われる。その違いは、ある追加回答によれば次のようなものである。

「中国では、会話を始める前に、なかなかその糸口を見つけるのが難しいのに対し、日本人は簡単に公式のような言葉を運用するのが本当に素晴らしいと思います。でも、日本人のこのような会話の仕方は逆の方向から見れば、面白さに欠けるのも事実です。中国人は会話を始める前に、どんなことを言うか、どのような言葉を使うかに工夫するから、相手に印象付けやすい、しかも自分の能力を表すにも役立つでしょう。」 ということで、中国人の会話では、開始直後から実質的なコミュニケーションが始まっていくために、「正直さ」の規範が会話の冒頭部分にも意味を持つことになるのだと思われる。

このように、「正直さ」という規範に関する領域でも、日中両国のコミュニケーション文化の間にかなりの差異があるため、中国人学習者の間に「日本人は本当の気持ちと違うことをよく言う」といった印象や違和感が生じやすくなっているのだと思われる。

(4)「同調への圧力」や「アイデンティティ問題」に関する違和感の背景要因について

次に、上記の例11や例12に見られる「同調・同化への圧力」についてである。この背景要因としては、集団主義的か個人主義的かという点における行動様式の差異が指摘できると思う。この点については、次のような追加回答があった。

「日本人のコミュニケーションについての1つの印象は、集団主義を重んじるのが日本人の性格であるということです。日本人は、コミュニケーションも集団をもとに行うのが普通のようです。例えば、学校でのサークル、クラブなどは、実際に集団でコミュニケーションを行う組織と私は思います。集団と合わない人は時々いじめられたり、集団から外されたりするのが目立つです。」

いくつかの中国人論、日中文化比較論などによると、両国の文化の差異の1つとして、日本人は集団主義的傾向が強いのに対して、中国人はより個人主義的であるということが言われている。具体的にどのような面でどの程度異なるのか、詳しいことはわからないが、一般的には、そういう傾向が認められるようだ。

社会生活の中でのそうした行動様式の差異は、コミュニケーション行動の仕方の面にも現れているように思われる。つまり、日本人は日常的なコミュニケーションの場面でも集団のその場の空気に合わせる努力を優先する傾向があるのに対し、中国人のほうはコミュニケーションにおける個人の自己表現としての面をより重視する傾向がある、ということである。

こうした面でもコミュニケーション文化の差異があるため、中国人学習者が日本人の集団の中に入って話の輪に加わるとき、他の皆が同調し合うのを見て違和感を感じると同時に、自分も同調せざるをえないと感じて圧迫感を感じることにもなるようだ。

もう1つは、「アイデンティティ」に関わる違和感が生み出される背景についてである。3.1で報告したように、多くの中国人学習者はコミュニケーション領域での差異の大きさを感じつつも、「郷に入っては郷にしたがえ」の考え方で、日本人的な話し方を習得し、実践しようとしている。そういう努力をしている中で、学習者によっては、ときどき自らのアイデンティティ感覚に反する言動をしているという違和感、抵抗感を感ぜざるをえなくなるようだ。このような意識の構造、心理の動きは、次のような回答内容にも現れていると思う。

「(問6) 不自然な感じというのは、日本人のように装って話さなければならないこと・・・自分に対する不正直な感じがする。日本人のようにしないと変に扱われがちではないか――先入観があってそうするのだ。(問9) よいと思わないが、日本に在し、日本人と話す時に日本人の仕方に服従するしかないではないか。だけど皆日本風になってしまうと日本人にも外国人にも利点はないと思う。」

この例を含め、「同調・同化への圧力」と「アイデンティティ問題」に関連する違和感の記述がいくつか見られたことも中国人の回答結果の特徴として感じられた。

4．韓国人学習者の意識

4．1　国別の集計結果から見た傾向

4．1．1　会話の仕方の差異についての意識

アンケートの問１から問３までの回答結果から、韓国人学習者の「会話の仕方の違い」についての意識を考察する。

〔表７〕［ 問１の回答分布 ］

問１「違い」	人数	比率(%)
a．よくある	8人	25.8
b．ときどき	16人	51.6
c．たまに	7人	22.6
d．ない	0	0
合計	31人	100

〔表８〕［ 問２の回答分布 ］（複数回答）

問２「どんな違い」	人数	比率(%)
a．すみませんを言い過ぎる	20人	64.5
b．謙遜の言葉をよく言う	8人	25.8
c．本当の気持ちと違うこと	20人	64.5
d．はい、いいえが不明確	22人	71.0
e．会話の進め方が違う	6人	19.4
f．その他	4人	12.9

まず、問１の「自分の国の会話の仕方と違うと感じたことがありますか」については、52%の人が「ときどきある」と答え、26%の人が「よく」、23%の人が「たまに」と答えている。平均値を求めると、3.03という数値になる。これは、東アジアの国々の中では最も低いものであり、全体平均の3.45と比べてもかなり低い数値である。

問２の「どんな点が違うか」という複数回答方式の質問に対しては、「はい、いいえがはっきりしない」が68%と最も多く、「本当の気持ちと違うことを言う」「すみませんを言い過ぎる。」も、各65%と高い比率を示している。これに対して、他の選択肢の比率は、２割台以下とはるかに低い。「f.その他」には４人が記入し、次のようなものがあった。①「はっきりしていなくて、わかりずらい。」②「会話の内容が最後までわからないこともある。」③「タテマエだということがよくわかる。」このように、韓国人の場合は、「はっきり言わない」という点に最も多くの人が差異を感じていることがわかる。

問３の、電話で不参加を伝える場面の会話例に対するコメントの記述では、何らかの違いを書いた人が75%だったのに対して、「似ている」と書いた人は25%であった。その「相違点」の記述では、「はっきり言わないこと」という内容のものが多かった。この点は中国人の場合と共通しているのであるが、どういう面が違うのかについては、「結論がはっきりしていない」、「理由をはっきり述べない」、「文末をはっきり言わない」というように、いくつかの内容に分かれていた。

「会話の進め方の違い」を指摘した人は、６人いた。その中には、「韓国では、本題に入る前に、いろいろ安否を聞く」、「会話が速くて簡単、全体が硬い感じ」、「韓国では、不参加の申し出をあっさり受け入れず、いろいろ説得を試みる」などの記述があった。一方で、「会話の進め方が似ている」

と書いた人も４人いた。

問３の「共通点」について記述した人は11人いて、その内訳は次のようであった。まず、「会話の進め方」が４人、「断り方がよく似ている」が２人、「申し訳ない気持ちがはっきり出ている」が２人、「ちゃんと謝る」が２人である。その他には１人ずつ、「軽率な言動を避ける」、「相手方を理解し、相手方の都合も考える」、「格の高い会話」、「あいづち」、「話の最後をはっきりしない言い方」、「電話のマナー」などの記述があった。このように、両国の会話の仕方には、共通点も多いらしいことが感じられた。

４．１．２　日本人の会話の仕方に対する違和感の頻度や好き嫌いの程度について

次に、問４から問７までの回答結果から、違和感や好き嫌いの面について見ていく。

〔表９〕［ 問４、問５、問７の回答分布と平均値 ］

国・地域	問４ａｂｃｄｅ	平均	問５ａｂｃｄｅ	平均	問７ａｂｃｄｅ	平均
韓国	4,15, 8, 3, 1	3.58	0, 2, 9,17, 2	2.30	2, 3,24, 2, 0	3.16
東アジア	8,24,28, 9, 2	3.39	2, 7,20,32,10	2.38	3,12,52, 5, 0	3.19
全体	10,34,43,13, 3	3.22	4,13,34,35,19	2.45	5,28,67, 6, 1	3.29

問４の「日本人の会話の仕方で話すことがあるか」という質問に対しては、48％の人が「よくある」、26％の人が「ときどき」と答えている。平均値は3.58で、全体平均および東アジアの平均とくらべると、かなり高くなっている。

問７の「日本人の会話の仕方で話すことが好きか、嫌いか」という質問に対しては、約77％の人が「どちらでもない」を選んでいる。「好きだ」、「大好きだ」は合計16％で、中国人とほぼ同じであり、全体の平均よりはかなり低い。一方、「嫌いだ」は6％で、こちらは全体平均と同じになっている。

問５の「その仕方で話すとき、不自然な感じや快適ではない感じが生じることがありますか」という質問に対しては、「たまに」が最も多く、55％、「ときどき」が29％となっている。平均値は2.30で、中国人学習者の2.46、全体平均の2.45に比べると、やや低い数値になっている。

４．１．３　日本人の会話の仕方に合わせることや、練習することに対する意識

〔表10〕　［ 問８、問10の回答分布と平均値 ］

国・地域	問８ａｂｃ	平均	問10ａｂｃｄｅ	平均
韓国	23, 7,1	4.03	1, 6, 6,11,4	2.54
東アジア	53,12,5	4.16	3,21,19,17,6	2.95
全体	83,13,8	4.21	7,33,30,21,9	2.81

問８の「日本人とは、日本人の会話の仕方で話したほうがいいと思うか」については、74％の学習者が「そう思う」を選んでいる。しかし、特徴的なのは、23％もの人が「そう思わない」を選び、「その他の意見」の３％と合わせると、約４分の１の学習者が異なる意見を示していることである。この割合は、全体の平均よりずっと高く、中国人の数値も上回っている。

問９で、「問８の答の理由」を見ていくと、肯定派の理由としては、「日本語の上達のために、そうしたほうがいい」が７人、「郷に入っては郷に従え」が３人、「日本の文化だと思うから」、「コミュニケーションの目的に合うから」が各２人となっている。中国人の場合と比べると、「郷に入っては」が少なく、「日本語上達のため」がずっと多いというのが特徴である。

否定派の理由では、「自分なりの話し方でいいと思う」に類するものが３人、「日本人の会話の仕方はよくないと思うので」、「外国人には難しいので、直接的に話したほうがわかりやすい」が各１人、無回答２人となっている。中間派（Cを選択）の人は、「いきなりそういう風になれない。自然に身に付いてくる。」という意見を書いている。

問10の「授業で、日本人の会話の進め方を練習したりすることがあるか」については、「たまに」が35％と最も多く、「ときどき」、「よく」がそれぞれ17％を占めていた。平均値は2.54と、全体平均よりかなり低くなっている。

問11の「授業でそれを学んだり、練習したりすることについては、どう思うか」に対しては、多くの人が肯定的であるものの、その中には「せざるを得ない」という消極的な賛成意見もいくつか見られた。また、否定的意見も少数あった。回答内容を分類して１つの表にまとめてみると、以下のようになる。

［表11］　［ 問11の回答例 ］

肯定的意見・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 21 件
①＜日本語の上達のために役立つ＞ 例１・日本語らしい日本語が書きたい、話したいというのが学習者の心だ。 例２・教科書でいくら学んでも不自然な会話になるので、日本人らしい会話を教えてくれれば、ありがたい。
②＜日本人との交流、文化理解のために役立つ＞ 例３・それは文化を学ぶことでもあり、大変望ましい。
③＜日本社会で生活するのに必要＞ 例４・日本で生活するためには必要だと思う。
消極的賛成意見・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4件
例５・日本人の特徴として理解してあげるべき。ある程度、勉強すべきだと思う。 例６・学んでいる立場なので、まねするしかしょうがない部分もある。
否定的意見・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2件
①＜授業より、他の場で習得できる＞ 例７・特に必要ないと思う。なぜなら、自然そうなるから。 例８・いちいち詳しく教えたりするのではなく、経験を話し合って気づかせるほうが、もっと自然な学習になる。

4．2　韓国人学習者の感じる違和感についての考察

4．2．1　違和感の内容と種類

問６に何らかの違和感や不満を記入した人は、中国人の場合よりも多かった。種類の上では、だいたい中国人の違和感の種類と重なるようなものが見られたが、その分布状況や記述された具体的内容を見ると、韓国人の違和感の特徴が感じられた。

[表12]　［　問６の回答の種類と分布　］

①　はっきり言わないことに対する違和感、不満・・・・・・・・・・・・・・・9件
例１・日本人はあいまいな返事をよくするが、自分の意志をはっきり伝えてほしい。 例２・何かを決めるときに、いつもみんなはっきり言わない。その時は、私は、そんな日本人と言いたくない。
②　深く心を伝え合うコミュニケーションがしにくいという不満・・・・・・1件
例３・意向の伝達ができても、相手の気持ちが伝わってこない場合もある。
③　真意を推測しながら聞くので疲れるという不快感・・・・・・・・・・・・2件
例４・はっきり言わないで、わかってくれることを期待して話をするから、初めはまごついた。あとには相手が何を話したがっているかが気になって話がよく進めない。
④　話の進め方に対する違和感、不快感・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1件
例５・説明が長く、結論が出ないまま、話が終わってしまうことが多い。会話は自分の意志をはっきり伝えるためのものでなければならない。
⑤　会話の決まり文句や社交上の習慣に対する違和感・・・・・・・・・・・・13件
例６・「ありがとう」と言うべきなのに、「すみません」と言う。 例７・物をもらったとき、過剰に感謝する。(「すみません」を連発する。) 例８・まちがいがなくても、なぜ、あやまらなければならないか。不自然に感じる。
⑥　相手の話に真実味がないという不信感・・・・・・・・・・・・・・・・・・1件
例９　「すみません」が多いので、本当にそんな感じか知れない。だから日本人はちょっと正直でないと思う。
⑦　待遇表現に関する領域での違和感、不快感・・・・・・・・・・・・・・・・1件
例10・クラスメートが家へ遊びに来たとき、妻に友達感覚で話すのを見て、びっくりした。
⑧　日本人の話し方に同調していく中での違和感・・・・・・・・・・・・・・・2件
例11・ささいなことでも「すみません」と言うのを聞くから、そうしなければならないと思って、そう言う。私は、感謝するときは「ありがとう」をよく使うから、ちょっと・・・ 例12・日本人は相手のことを尊重して、同意する言葉をよく使うから、私も使うようになった。

4．2．2　韓国人の違和感の集計結果に見られた特徴

このように、韓国人学習者の違和感を分類してみると、その種類の範囲は大部分、中国人学習者

のものと重なり合っている。

しかし、種類別の件数の分布状況を見ると、特徴的なことも感じられる。その1つは、⑤「会話の決まり文句・・」の件数が際立って多いこと、しかも、そのほとんど全て（1件を除いて）が「すみません」の使い方に関わるものだということである。⑤以外の種類にも、「すみません」の使い方に関するものがあるので、これらを合計すると、「すみません」に関する違和感は、11件で、全体の36.6%を占めている。これは、中国人、台湾人の場合には見られなかった現象である。

また、「はっきり言わないこと」に関連する違和感の記述が多いことも特徴である。上記の①、②、③の件数を合計してみると、12件で、全体の40%を占めている。中国人の場合は、この合計が27.7%だったので、それを上回っているのがわかる。

内容の面では、特に、「待遇表現」に関するもの、「同調、同化」に関するものについて、中国人の記述内容との違いが感じられた。まず、「待遇表現」に関しては、韓国人では「日本人の若者が、丁寧な話し方をすべきところで、しない」という不快感の記述が見られるのに対して、中国人の場合は逆に「丁寧すぎる話し方」への違和感が表明されることが多いことである。また、「同調、同化」では、韓国人の場合も違和感の記述は見られるものの、アイデンティティ問題にまで言及した記述は見られなかった。

4.2.3　各種の違和感の背景要因

(1)「はっきり言わないこと」に関連する違和感の背景要因

韓国人学習者の場合も、「日本人がはっきり言わないこと」に対しては、強い違和感や不満を感じることが多いようだ。上記①、②、③、④の種類の違和感は、いずれも、この面に関連したものである。

これらの違和感が生じてくる背景には、高コンテキスト性の程度に関する日本と韓国のコミュニケーション文化の差異がある。そして、その差異は、対照的という言葉があてはまるかもしれないほど大きいものであるようだ。例えば、韓国のコミュニケーション文化の特徴について、渡辺吉鎔氏（1981）は次のように書いている。

「韓国人コミュニケーションは、日本流とは逆に、まずものごとをはっきりと言うのをよしとする。2番目に、韓国人は、人間である以上は、老若男女を問わず、個人としてのはっきりとした意見を持つべきだと考えている。3番目には、自分をさらけ出すことによって、相手とのコミュニケーションをはかるべきだと思っている。」

ここで、「自分をさらけ出す」という言葉が使われているのであるが、これは、「高コンテキスト性の程度」における韓国文化の位置を端的に表している表現だと思われる。つまり、他者とのコミュニケーションにおける韓国人の「自己開示」の程度が著しく高いことを、実感にもとづく言葉で表現していると感じられるのである。

韓国人のコミュニケーション文化のこうした特徴は、実証的研究によっても確かめられつつある。

林建彦氏（1990）が行った、日本・中国・韓国のコミュニケーション文化に関する比較調査の報告[3]によれば、「会話における平均的自己開示」の程度は、韓国人が最も高かったのである。そして、とくに同性の友人などの親しい相手に対しては、その程度が著しく高くなり、アメリカ人のそれに近づくことが報告されている。前記の３．２では、中国人も一般的に「直接的に、はっきりものを言う」のが特徴であることを指摘したのであるが、ここでは、韓国人の「はっきり言う」程度はその中国人をも上回るほどのものであることを指摘しておきたい。

こうした特性を持つコミュニケーション文化の中で育ってきた韓国人留学生は、日本人のコミュニケーションに対して、次のような印象、感想を述べている。

「（問６－２）日本人のコミュニケーションで一番印象的なことは、曖昧さだ。言いたくない、というのではなく、相手がわかってくれると思うからだろう。しかし、外国人は言葉で言ってもらわないと、わからない。」

このように、コミュニケーション文化の基本的特質とも言うべきもののレベルで両国の間に大きな差異があるため、このことに関連する違和感や不満が数多く発生してくることになるのだと思われる。

(2)「深いコミュニケーションができない」という不満の背景要因

前記の「自己開示の程度」という差異は、友人関係における行動様式や考え方の差異ともつながっているようだ。渡辺吉鎔氏は、前記の引用部分に続けて、次のように書いている。

「日本人には『親しき仲にも礼儀あり』という考え方があって、相手の領域に深く立ち入らないのを礼儀正しいとしているが、韓国人の考え方からすれば、礼儀云々といった形式的なきれいごとにこだわっている間は、真の友人関係はないということになる。したがって、相手との積極的な交際を望んでいる場合には、自分をさらけ出し、相手にも同様のことを要求する。」

ここでも、「自分をさらけ出す」という表現が使われているのであるが、これに関連して、私の教えた韓国人留学生がスピーチの中で、同国人との友達づきあいについて「お互いに百パーセント見せ合う」という言葉で表現していたのが思い出される。韓国人の友人関係の特徴はこういう面にあるようだ。３．２で、中国人の友人関係について見た中で、留学生の回答の中に「何でもしてあげる」という表現が見られた。これが中国人の友人観のキーワードとすれば、「何でも見せ合う」というのが韓国人の友人観のキーワードと言えるのかもしれない。

こういった友人観を持ち、距離を置かない友達づきあいを経験してきた韓国人留学生にとって、日本人同士の友人関係は次のように映ることになる。

「（問６－２）日本人のコミュニケーションを見て感じたのは、親しい友達の関係であっても、すごく遠慮することが不自然ではないか、ということです。韓国人なら気にしないこと（友達からノートを借りることなど、・・）を日本人なら、すごく気にすることです。」

この他に、追加回答の中には、「日本人は仲間同士とそれ以外の人とのコミュニケーションの仕

方が違う。その仲間に入るのが難しく、仲間に入らない限りは表面的なコミュニケーションしかしてくれない。」といった内容のものも見られた。これも、各種の人間関係における行動様式の違い、コミュニケーションの仕方の違いから生じてきた不満の１つであると言えよう。

(3)「すみません」の多用に関する違和感の背景要因

前記のように、韓国人留学生の問６の回答結果には、「すみません」という言葉に関するものが際立って多いという特徴が見られた。なぜ、韓国人学習者の回答にはこうしたものが集中的に現れてくるのだろうか。

まず、記述例からもわかることだが、「すみません」が使用される場面、機能について大きなずれがあることも１つの要因である。しかし、この点は、他の国と日本の間にもある差異だと思われる。その中で、どうして韓国人が特に、このずれに注意を引きつけられていくのだろうか。

この背景にあるものは、「あやまる」という言語行動に関して、日本と韓国の間にはっきりした文化的差異が見られることである。

韓国の側について言うと、「すみません」を意味する言葉を発することは、「自分の非を認めて、相手にわびる」ことを意味するために、その言葉の持つ重みがとても大きくなっているようだ。留学生の話によると、「それを言う時は、何か自分がまちがいをして、その責任を取らなければならないような重たい感じがする。」ということである。その当然の結果として、韓国では「すみません」に当たる言葉の使われる機会は、狭く限られていくことになる。相手に実質的な被害を与えたときで、しかも自分の側に過失責任があることが明らかなとき、といった条件が加わるからである。

こうした違いがよく現れている例として、前記の林論文にも引用されている次のような話を紹介しておきたい。これは、ある座談会で在日韓国人実業家が韓国人との間の文化摩擦について語っているものである。

「ミスをしても、まずスミマセンとは言わない。日本では、スミマセンと言うと、改悛の情を汲んでくれて、次のチャンスガ与えられる。しかし、こちらではクビになること、損害を弁償することを覚悟しないと、スミマセンをうかつには言えない。こちらに長くいてそうはわかったつもりでいても、ミスして謝らないのには違和感が消えません。」(「現代コリア」84年８月号)

このような背景があるために、韓国人留学生が日本での生活を始めると、日本人がいろいろな場面で「すみません」を言うのを見て、カルチャーショックを感じるらしい。ある留学生は、「すみません天国、日本」と題したスピーチの中で、「来日した直後は、いつでも、どこでも、『すみません』という言葉を聞くので、日本にはなんと謙虚で、礼儀正しい人たちが多いのだろうと感心した。」と、その驚きを語っていた。　以上のように、「あやまる」という言語行動に関して、日本と韓国の間には際立った差異があるため、とくに韓国人留学生の間にカルチャーショックや強い印象を生み出しやすいということが、この種の違和感の記述が多数出てくることの主な背景要因になっていると思われる。

最後に、6-2の回答内容の中で、日本と韓国のコミュニケーション文化の差異を凝縮して表していると思われる事例を紹介しておきたい。

「(問6-2) 日本人は相手にすごく距離を置き、自分の気持ちをよく伝えたくなく、小さなことにも、すまないと思う。」

5. 台湾人学習者の意識

5.1 国別の集計結果から見た傾向

5.1.1 会話の仕方の差異についての意識

アンケートの問1から問3までの回答結果から、台湾人学習者の「会話の仕方の違い」についての意識を考察する。

[表13] [問1の回答分布と比率]

問1「違い」	人数	比率(%)
a. よくある	3人	27.3
b. ときどき	8人	72.7
c. たまに	0	0
d. ない	0	0
合計	11人	100

[表14] [問2の回答分布と比率] (複数回答)

問2「どんな違い」	人数	比率(%)
a. すみませんを言い過ぎる	3人	27.3
b. 謙遜の言葉をよく言う	6人	54.5
c. 本当の気持ちと違うこと	7人	63.6
d. はい、いいえが不明確	6人	54.5
e. 会話の進め方が違う	4人	36.4
f. その他	1人	9.1

まず、問1の「自分の国の会話の仕方と違うと感じたことがありますか」については、73%の人が「ときどきある」と答え、27%の人が「よく」と答えている。平均値を求めると、3.28という数値になる。これは、全体の平均よりはやや低く、東アジアの国々の中で比べると、中国と韓国のほぼ中間に位置する数値である。。

問2の「どんな点が違うか」という質問に対しては、「本当の気持ちと違うことを言う」が64%と最も多く、「はい、いいえがはっきりしない」「謙遜することをよく言う」も、各55%と高い比率を示している。この3つの答が上位を占めるのは中国人の場合と同じであり、この点では共通性が感じられる。他には「会話の進め方」がやや高く、36%、「すみません」は27%となっている。

問3の、電話の会話例に対するコメントの記述では、何らかの違いを書いた人が11人中、5人、「だいたい同じ」と書いた人が同じく5人と、半数ずつに分かれた。

その「相違点」の記述では、「行けないことをはっきり言わない」、「会話の進め方が違う」などの他、「もともと行く気がなかったかもしれない」という指摘も見られた。特に集中的に現れる種類の内容は見られなかった。

「共通点」の記述では、「会話の初め」、「あいさつの使い方」、「呼びかけを除いて、よく似ている」、

「行かなくても、前もって電話をかけて相手に説明すること」などがあり、こちらにも集中的に現れる種類の内容は見られなかった。

5．1．2　日本人の会話の仕方に対する違和感の頻度や好き嫌いの程度について

〔表15〕［ 問４、問５、問７の回答分布と平均値 ］

国・地域	問４ａｂｃｄｅ	平均	問５ａｂｃｄｅ	平均	問７ａｂｃｄｅ	平均
台湾	0，2，8，1，0	3.09	1，1，1，6，2	2.36	1，4，6，0，0	3.54
東アジア	8,24,28，9，2	3.39	2，7,20,32,10	2.38	3,12,52，5，0	3.19
全体	10,34,43,13，3	3.22	4,13,34,35,19	2.45	5,28,67，6，1	3.29

問４の「日本人の会話の仕方で話すことがあるか」という質問に対しては、73％の人が「ときどき」と答えていて、この答に集中しているのが感じられる。平均値は3.09で、全体平均よりやや低く、東アジアの中では最も低い。

問７の「日本人の会話の仕方で話すことが好きか、嫌いか」という質問に対しては「どちらでもない」が55％で最も多いものの、「好きだ」、「大好きだ」も合計45％となり、半数に近い割合を占めている。これは、東アジア平均の21％や、全体平均の31％よりもはるかに高い数値である。東アジアの他の国々には見られない高さであり、台湾の特徴的な傾向であると感じられる。他方、「嫌いだ」「大嫌いだ」は、１人もいなかった。

問５の「その仕方で話すとき、不自然な感じや快適ではない感じが生じることがありますか」という質問に対しては、「たまに」が55％と最も多く、他の答はいずれも少数にとどまっている。平均値は2.36で、全体平均よりはやや低く、東アジアの平均に近い数値である。中国は2.46、韓国は2.30であるから、この点でも両者の中間ぐらいの位置にあると言える。

5．1．3　日本人の会話の仕方に合わせることや、練習することに対する意識

〔表16〕　［ 問８、問10の回答分布と平均値 ］

国・地域	問８ａｂｃ	平均	問10ａｂｃｄｅ	平均
台湾	9，1,1	4.45	0，5，4，1,0	3.23
東アジア	53,12,5	4.16	3,21,19,17,6	2.95
全体	83,13,8	4.21	7,33,30,21,9	2.81

問８の「日本人とは、日本人の会話の仕方で話したほうがいいと思うか」については、82％の学習者が「そう思う」を選んでいる。一方、「そう思わない」、「その他」は、各18％にとどまっている。平均値は4.45となっており、これは全体平均や、東アジアの平均よりもかなり高い数値である。問７の「好きだ」の割合が多いことと合わせて、肯定派がほとんどであることが特徴的である。

問９で、「問８の答の理由」を見ていくと、肯定派の理由としては、「日本語の上達のために、そうしたほうがいい」が３人、「日本人相手にはそうするのが当然」が２人、あとは、それぞれ異なる理由が３人となっている。その中で特徴的だと思うのは、「日本語を話すとき、とてもやさしい、聞き良い感じがあると思う。」、「敬語がある。本当にいい言語だと思う。」というように『日本語の話し方が好きだ』という意味の理由が見られることである。このことも、中国人、韓国人には見られたなかったことである。

否定派の理由では、「自分の言いたいことがちゃんと伝わればいいです。」があり、中間派の理由では、「話題によって、自分の意見をアピールしたい時には、日本人の会話の仕方で話さなくてもいい。」というものが見られた。

問10の「授業で、日本人の会話の進め方を学んだり、練習したりすることがあるか」については、45％の人が「よくある」、36％の人が「ときどき」を選んでいる。平均値は3.4で、全体平均や東アジアの平均と比べて、かなり高いほうである。

問11の「授業でそれを学んだり、練習したりすることについては、どう思うか」に対しては、約半数の人が、「いいと思う。」「面白い。」などの肯定的意見を書いている。一方、現在そのような練習をしている中で感じていることとして、「実際に話すときと、うまくつながらない」などの批判的意見も見られた。

回答内容を分類して１つの表にまとめてみると、以下のようになる。

［表17］　［ 問11の回答例 ］

肯定的意見・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５件
①＜日本語の上達のために役立つ＞
例１・いいと思う。そうすると、日本語がうまくなれると思う。 例２・いいと思う。読解や文法を中心に学んできたが、生活の中では自分の言いたいことを会話の中で相手に伝わることが大事だと思う。
②＜日本人との交流、文化理解のために役立つ＞
例３・日本人はどんな考えをするか、わかりやすいと思う。
③＜その他＞
例４・とても面白い。 例５・いいと思う。でも、日本人がよく使う言葉、ちょっとむずかしい。
批判的意見・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１件
例６・練習の機会がたりない。本当に日本人と話すときは授業で学んだ方法をなかなかしない。
その他の意見・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２件
例７・日本人の友達ができたら、他の人と話す勇気、自信がもっとある。日本に来たら、日本人の友達を作るのも必要だと思う。

5．2　台湾人学習者が感じる違和感についての考察

5．2．1　違和感や不快感の内容と種類

台湾人学習者の問６の回答結果を分類、整理していくと、以下のような５つの種類にまとめることができる。

[表18]　[　問６の回答の種類と例　]

①意見をはっきり言わないことに対する不満・・・・・・・・・・・・・・・・・１件
例１・自分の意見を言わないで、相づちを打つのが上手。言葉に自分の感情を入れないのは不自然に感じる。
②会話の決まり文句や社交上の習慣に対する違和感・・・・・・・・・・・・・１件
例２・（問６の記入例「すみませんを言い過ぎると思う・・」に対して）そうです。　→例７に続く。
③話の進め方に対する違和感・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１件
例３・進め方は決まった順番で行く感じ。使いやすいけど、不自然な気がする。
④待遇表現に関する違和感・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４件
例４・丁寧すぎて、不自然な感じがすることがある。いろんな敬語を使って丁寧すぎると思う。 例５・丁寧語を話すときに、丁寧すぎてかえって冷たく感じる。 例６・敬語を使いすぎて、快適ではない感じがする。 例７・学校では、先輩と後輩制、みんな学生だから、そういう差別がしたくない。敬語とか、いっぱい使うと、何か変と思わないですか。
⑤非言語行動に関する違和感・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２件
例８・日本人は、話すときに、あまり相手の眼を見ない。 例９・ニコニコ笑って話すが、自然な笑顔だと感じない。偽善的な感じがする。

5．2．2　台湾人学習者の違和感の特徴

前章まで中国人、韓国人の違和感等については、それらの背景要因まで考察してきたのであるが、台湾人の違和感については、参考文献として利用しうる資料が乏しいなどの事情があるため、背景要因についてはふれないことにする。その代わりに、問６の回答内容の分析から感じられる台湾人学習者の違和感における特徴的な傾向などを指摘しておきたい。

まず、違和感の種類についてであるが、ここでも、「意見をはっきり言わないこと」への違和感、不満が現れている。これは、中国人、韓国人との共通点であると言える。また、「言葉に感情を入れないのは不自然」というのも、韓国人学習者の回答にあった「相手の気持ちが伝わってこない場合もある」というものと内容の面での共通性が感じられる。このように、「はっきり言わないこと」への違和感や、「心を伝えるコミュニケーションがしにくい」という不満は、東アジアの３カ国の

留学生の共通した感想、印象であることがわかる。

次に、非言語行動の面であるが、台湾人の「日本人は、眼を見て話さない」という指摘は、中国人にも見られたものである。一方、「ニコニコ笑って話すが不自然。偽善的に感じる」というのは、韓国人の中にも「日本人は人に対していつも笑っている」という形で共通の内容のものが見られた。これらの非言語行動の違いが「不正直」あるいは「偽善性」のイメージという文脈で取り上げられるのも共通点であると言えよう。

一方、台湾人の回答内容の特徴として感じられたこともある。

その1つは、「敬語の使い方」や「丁寧な話し方」への違和感の記述が多数現れていることである。敬語使用に関するものは中国人、韓国人学習者の回答にも見られるのであるが、回答数に占める割合がこれほど多くなるのは、中国にも韓国にも見られなかったことである。

その記述内容を見ると、「丁寧すぎる」、「敬語を使いすぎる」という表現がよく使われている。そして、そのことによって、「快適ではない」とか、「不自然だ」とか、「冷たい」というようなネガティブな感じを持っていることがわかる。また、内容的に非常に似通った意見が並んでいるという印象も受ける。一方では、「学校では、みんな学生だから、先輩と後輩というような差別がしたくない。敬語とかいっぱい使うと、なんか変と思わないですか。」という、上下関係のきびしさへの批判と結びついた違和感の記述も見られた。これは中国人、韓国人には見られなかったものである。

2つめは、回答の中で日本人の話し方の特徴的な面についてコメントしている場合は、多くの場合、「・・・・のは、不自然」という形が使われていることである。このように、日本人の話し方の特徴を取り上げ、「自然かどうか」という基準で評価的なことを述べることは、中国人、韓国人の回答の中にはほとんど見られなかったもので、台湾人学習者の回答内容の特徴と感じられた。

その内容は、例えば、「言葉に自分の感情を入れないのは不自然に感じる。」とか、「進め方は決まった順番でいく感じ、使いやすいけど、不自然な気がする。」とか、「丁寧すぎて、不自然な感じがすることがある。」などである。このように並べてみると、そこから「好ましい話し方」についての彼等の間で共有された感覚というものもうかがえる感じもする。すなわち、親しみが感じられ、感情を率直に表し、型にはまらず自由に展開されるような話し方というようなものである。それは、台湾社会における日常的なコミュニケーションの仕方の特徴とも関連しているのかもしれない。

台湾の場合、データ数が少なかったこともあり、確定的なことは言えないが、今回の調査結果に現れた特徴的なこととして、以上の2つを指摘しておきたい。

6．おわりに

今回の調査によって、主に以下のような成果が得られたと思う。

(1) 東アジアの3カ国の留学生については、日本人の会話やコミュニケーションの仕方にどのような違和感を感じているか、また、感じやすいかを把握できたこと。

(2) さらに、中国人および韓国人学習者の違和感の背景要因を考察することによって、それぞれの国の特徴的傾向を明確につかむことができたこと。また、その作業を通じて、ある種の違和感については、その内容、性質もより深く理解することができるようになったこと。

(3) 多くの学習者が、上記のような違和感を感じつつも、日本人の会話の仕方を習得することに積極的な意欲を持っていることがわかったこと。

(4) 授業の中で日本人の会話の仕方を教えることについては、いろいろな面で工夫、検討をしていくべきだという方向性と、そのためのいくつかの具体的示唆が与えられたこと。

(5) なお、東アジア地域の国々でも、少数だが、日本人の会話の仕方に合わせる中で、アイデンティティ維持に関わる違和感を感じている学習者もいることが確認された。

以上のように、調査の目標に対応する成果はおおむね得ることができたと思うのであるが、その中でも2、3、不足している点を感じたところもある。その1つは、今回の調査では会話の仕方の差異の意識や違和感の把握に重点を置いたため、会話の教育に対する意識については、わずかな質問をしたにとどまり、具体的なところまでは調べられなかったことである。

今後は、調査を継続して、東アジア以外の国々、地域についても、上記のことを明らかにしていくとともに、会話の教育に関する学習者の意識についても、多様な面から実態把握の調査を行っていきたいと思っている。

注

(1) エドワード・T・ホール「沈黙のことば」(邦訳・南雲堂) などによる。

(2) 下記の参考文献7に所収。

(3) 下記の参考文献9：p28-33による。

参考文献

1. 邱永漢 (1993)『中国人と日本人』中央公論社
2. 孔健 (1987)『中国人とつき合う法』学生社
3. スミス,R (1996)「学習者から見た日本語学習ー日本語独習者の学習自叙伝に見られる社会的および情緒的要因の分析を中心に」『日本語教育・異文化間コミュニケーション』p105-125 凡人社
4. 祖父江孝男 (1990)「韓国人の意識と行動ー今日までの諸研究の比較考察」『韓国社会の文化人類学』p124-140弘文堂
5. 都築洋 (1996)『中国人の心』総合法令
6. 直塚玲子 (1980)『欧米人が沈黙するときー異文化間のコミュニケーション』大修館書店
7. 中村治 (1994)『日本と中国、ここが違う』徳間書店
8. ネウストプニー,J.V. (1982)『外国人とのコミュニケーション』岩波書店

9．林建彦（1990）「日本人、韓国人、中国人の表現構造比較－D.C.バーンランド教授の日・米比較をベースとして－」『行動科学研究』第30号：p15-42
10．ホール.E.T.（1966）『沈黙のことば』南雲堂
11．水谷修（1989）『話しことばと日本人　日本語の生態』創拓社
12．渡辺吉鎔・鈴木孝夫（1981）『朝鮮語のすすめ　日本語からの視点』講談社

資料1　調査対象者の国籍別内訳

1．東アジア地域

中国：28名　韓国：31名　台湾：11名　香港：2名

2．東南アジア地域

タイ：4名　マレーシア：4名　インドネシア：2名

シンガポール、ミャンマー：各1名

3．南、西アジア地域

バングラデシュ：2名　スリランカ、イラン、アゼルバイジャン：各1名

4．ヨーロッパ地域

スロヴェニア、イタリア、フランス、ベルギー、アイルランド：各1名

5．北米地域

アメリカ：4名　カナダ：1名

6．中南米地域

ブラジル：3名　メキシコ：3名　パナマ、アルゼンチン：各1名

［合計］　23カ国、1地域（調査時点の香港）：107名

資料2　アンケート調査用紙（改訂版）

『日本人の会話とその教育』に関するアンケート調査

この調査は、日本語の学習者が、日本人の会話の進め方や言葉の使い方についてどう感じているかを調べるためのものです。また、日本語教育の会話の授業についてどう思っているのかも知りたいと思います。調査のデータから、日本と他の国々との間の異文化コミュニケーションの問題を考え、それに基づいて、日本語会話教育についても見直していきたいと思っています。

アンケート調査の結果は、日本語の授業の成績評価には、影響しません。また、調査目的以外には使用しません。

（注）『会話の進め方』とは、たとえば、先生に欠席の許可を求めるとき、1)何について話すかを示す 2)その日、何があるかを言う 3)自分がしなければならないことを言う 4)休んでもいいかどうかを聞く、というように、よくある順番で話を始め、話を続け、話を終えるやり方のことを言います。

（フェイスシート省略）

［質問］

1　これまで日本語を習ったり、日本人と話しているとき、自分の国の会話の仕方と違うと感じたことがありますか。a，b，c，dの中から1つを選んで、○をつけてください。

a よくある　　b ときどきある　　c たまにある　　d ない

2　a，b，cを選んだ人は、どんな点が違うかを考えて、次の中から選んでください。(いくつ選んでもいいです。)

a　日本人は「すみません」を言いすぎる。

b　謙遜する言葉をよく使う。

c　本当の気持ちと違うことをよく言う。

d　答が「はい」か「いいえ」か、はっきりしないことがある。

e　会話の進め方が違う。

f　その他 _____

3　日本人の会話の進め方と、自国の人の会話の進め方は、どのように違いますか。下の会話例を読んで、相違点（違っていること）と共通点（似ていること）を考えて、説明してください。

例［AがBに、あるパーティーに欠席することを電話しています。］

A：会社員　　B：Aの知人

A：もしもし。
B：はい、田中です。
A：山下です。こんばんは。
B：ああ、山下さん。
A：あのー、日曜日のパーティーのことなんだけど。
B：ええ。
A：実は、会社のほうから急に仕事を頼まれちゃって……。
B：ええ。
A：それで、今回はちょっと……。
B：ああ、そうですか。
A：もうしわけない。
B：いいえ。残念ですけど、またこの次にでも。
A：ええ。また誘ってください。じゃあ、そういうことで。
B：はい、失礼します。
A：失礼します。

コメント（相違点、共通点についての）を書いてください。

4　日本人とのコミュニケーションで、日本人の会話の仕方で困ることがありますか。a～eの中から1つを選んで、○をつけてください。

a　いつもある　　b　よくある　　c　ときどきある
d　たまにある　　e　ない

5　日本人の会話の仕方にしたがって話すとき、何か「不自然な感じ」や「快適ではない感じ」や「言いたくない感じ（無理に言わされる）」が生じることがありますか。a～eの中から1つを選んで、○をつけてください。

a　いつもある　　b　よくある　　c　ときどきある

d　たまにある　　e　ない

6　5でa，b，c，dを選んだ人に聞きます。

5番の、あなたが日本人と話しているときの「不自然な感じ」や「快適ではない感じ」や「言いたくない感じ」とは、どのようなものですか。具体的に例をあげて、説明してください。

6-2　日本人の会話の仕方や、コミュニケーションの仕方について、どのような印象、感想、意見を持っていますか。

（例）日本人は、はっきり言わないことが多いと感じている。それは、自分の本当の気持ちを伝えたいという熱意がないからだと思う。

7　日本人の会話の仕方で話すのは、好きですか、嫌いですか。1つを選んでください。

a　大好きだ　　b　好きだ　　c　どちらでもない

d　嫌いだ　　e　大嫌いだ

8　日本人と日本語で話すときは、日本人の会話の仕方で話したほうがいいと思いますか。

a　そう思う　　b　そう思わない

c　その他（その内容を書いてください。）

9　質問８の答の理由をかんたんに説明してください。

10　日本語を習う（習った）とき、会話の授業の中で、日本人の会話の進め方を学んだり、練習したりすることがありますか（ありましたか）。

a　いつも　　b　よく　　c　ときどき

d　たまに　　e　ない

11　会話の授業の中で日本人の会話の進め方（用紙１ページの注を参照）を勉強したり、練習したりすることについては、どう思いますか。自分の意見を書いてください。